

「肝転移 メカニズムと臨床」

磨伊 正義 編集

熊本大学医学部教授・第2外科

小 川 道 雄

悪性腫瘍と良性腫瘍の決定的な相違は、悪性腫瘍が浸潤能、転移能を持つことである。転移はリンパ行性、血行性、播種性に大別されるが、腫瘍外科医は血行性転移、播種性転移に対しては絶望感を抱いていた。しかし最近では、特に血行性転移に対して、手術を中心に放射線療法、化学療法、免疫療法などを駆使して、果敢に戦いが挑まれるようになった。しかしながら血行性転移の治療成績の飛躍的な向上は、なお達せられていないのが現状である。

金沢大学がん研究所の磨伊正義教授の編集された「肝転移—メカニズムと臨床」は、血行性転移のうちでも最も頻度が高く、しかもその治療戦略が視野に入ってきた肝転移的をしばった書籍で、ほかに類をみない好著である。

肝転移に関連して臨床医が抱く疑問を、今思いつくままに挙げてみると、なぜある臓器の癌が、あるいは分化度の高い癌が肝臓へ転移しやすいのか、原発巣よりはるかに大きい肝転移をみることがあるが、増殖速度が原発巣と肝転移巣で異なるのは

なぜか、肝転移の成立経路(経門脈性、経動脈性、リンパ行性)によって、転移機構に相違があるのだろうか、相違があるとしたら治療方法も変わってくるのだろうか、などがある。

本書の半分は肝転移の基礎編であるが、この基礎編でこれらのほとんどについて納得のいく説明がなされている。また転移の分子機構、遺伝子、血管新生、細胞外マトリックス分解、接着分子、分子標的治療の章は、肝転移のみならず、ほかの血行性転移の成立機序を理解するのにそのまま役立つように、高度の内容が多数のイラストとともに、平易に解説されている。転移のマルチステップのどこで阻止すればよいのか、特に転移研究を行っている臨床系の大学院生には良いヒントになろう。

一方臨床編では、現時点で用いられている肝転移の予知、診断、治療の方法がまとめてある。更にここには、近い将来に臨床応用が期待されるものも挙げられている。

本書の特徴として、明解でしかも統一のとれた記載、わかりやすい多数の図表のほかに、用語解説がある。

重要な用語がそれぞれの章で取り上げられ、専門家以外にもわかるように解説されており、理解に役立つ。また編者の磨伊教授のご性格なのか、本書では評価のまだ定まっていない直近の文献を取り上げるのは避けられているが、肝転移の臨床や転移研究ですでに位置づけのなされた重要な文献は、ほとんどすべて網羅されている。

肝転移は消化器癌に限ったものではない。消化器外科医のみならず、呼吸器外科医、婦人科医、泌尿器科医、乳腺・内分泌外科医などに、本書の一読をぜひおすすめしたい。1つの臓器の癌の肝転移だけでなく、他の臓器の癌の肝転移の機構、予知、診断、治療を知ることによって、肝転移の診療における視点が大きく変わるのではないかと考えるからである。

● B5 頁 240 図 64 写真 90
カラー写真 19 表 47 2000
定価(本体 12,000 円 + 税) 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)